

ネオリベラリズムの時代における『社会的なもの』の再想像/創造 —グローバル・サウスの社会開発・政策の諸事例から

広島大学 大学院国際協力研究科 教授

関 恒樹

(お問い合わせ先) TEL : 082-424-6948 E-MAIL : seki@hiroshima-u.ac.jp



研究の背景

「社会的なもの (the social)」とは、人々が互いの生を保障するために形成してきた相互性であるといえます。それは、見ず知らずのアカの他人の間柄においても、徴税と再分配を通じた相互扶助を可能にする思想として、日本や西欧諸国における近代福祉国家を支えてきました。しかし、グローバル化とネオリベラリズム (新自由主義) の浸透により、人々の生活を支えるセーフティネットは、国や社会によって保障されるものではなく、個人の自助努力と生産性の向上によって獲得されるものという思潮を流布させています。

「社会的なもの」の喪失ともいえる今日の状況において、いかにして新たな社会的つながり、紐帯の模索が可能なのでしょうか。本研究では、この問いを非西欧の途上国や新興国、つまりグローバル・サウスの現状から論じました。

研究の成果

本研究では、フィリピンの首都マニラのスラムにおける貧困層コミュニティ、地方の漁村集落、国内の雇用不足を背景とした海外出稼ぎ・移住者たちなどを対象にフィールドワークを行いました。特に、これらのコミュニティや人々を対象にした貧困削減、資源管理、出稼ぎ促進政策などの社会開発プロジェクトに動員されるアクター (例えば、地方自治体、近隣アソシエーション、協同組合、NGO、家族) と、地域社会に由来から存在する伝統的かつ親密な紐帯が相互作用し、接合し、協働する中で、いかなる新たなつながりが生じているのか、そしてその新たなつながりが、より広範な人々の連帯を可能にする「社会的なもの」に開かれていく可能性について考察しました。そこからは、公的な連帯や扶助が、私的な親密なつながりに接続されることで初めて可能になるレジリエンスが理解できました。

今後の展望

本研究で得た知見は、「グローバル・サウスからの新たな市民社会論の可能性」というテーマへ発展させることが可能です。市民社会とは、西欧近代資本主義の形成

と発展に資する理性と規範を身に付けた市民によって構成される社会だといえます。しかし、今日の途上国や新興国においては、そのような市民や市民社会の領域はごく限られており、市民社会によっては対処できない問題が多く存在します。

グローバル化する今日の世界を取り巻く様々なリスクや不確実性に対処するためには、どのような市民社会の形態が必要なのでしょうか。グローバル・サウスの経験はこの点でも多くの示唆を与えてくれると思われます。

関連する科研費

2006-2008年度 若手研究 (B) 「東南アジアのグローバル化とミドルクラス・アイデンティティ生成の文化論的研究」

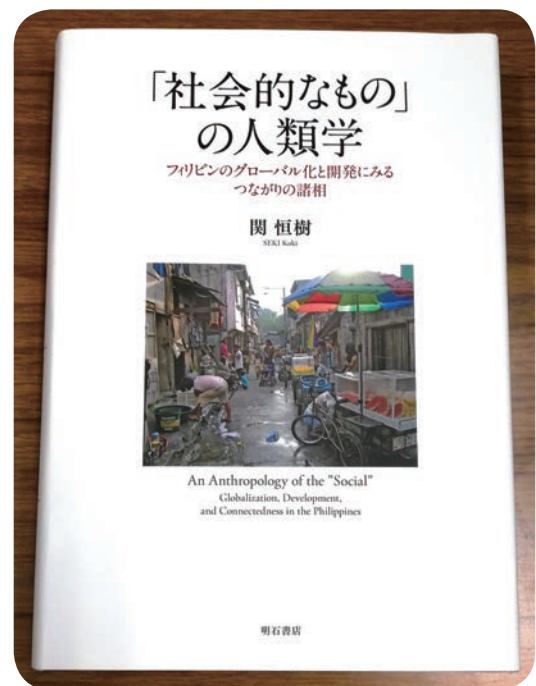
2009-2011年度 基盤研究 (C) 「ネオリベラリズムの時代の資源管理と共同体：フィリピンの海域資源管理の事例から」

2012-2014年度 基盤研究 (C) (一般) 「途上国の社会政策にみる統治性と主体構築—フィリピンの都市貧困層地区の事例から」

2015-2018年度 基盤研究 (B) (海外学術調査) 「社会的なものの再編とリスクの統治—フィリピンの脆弱性とレジリエンスの民族誌から」



調査地マニラ首都圏のスラム



研究成果をまとめた著書